



## 児島真爾 准教授

担当教科：多文化社会論、社会階層論、国際社会学、基礎演習

## TIPS まとめ

1. 教師から学生への効果的な問いかけ
2. 学生自身の生活と関わるテーマを取り上げる
3. 教師から学生へ・学生から教師へ・  
学生から学生へ：知識のデリバリー

### Q. 質の高い授業というのはどのようなものだと考えますか？

**A.** 担当している科目は方法論の授業やディシプリンの専門科目、学部生から院生の授業内容もレベルも多岐にわたるので、一括りにして考えづらいです。加えて、大学院生時代の僕の指導教官は当時20年以上にわたり教鞭をとってきたにも関わらず、学部生は不思議な存在で彼ら・彼女らをどう教えたらいいのか未だに正解がわからない、と言っていました。実際には質の高い授業を実施されていましたが、思

い悩み続けながら授業をされていました。僕自身、何が正解なのかわかりません。質の高い授業へのヒントを得るために、ペダゴジーに関する文献を読んだり、毎授業の学生の反応だったり授業評価アンケートの回答を参考に教案を修正しています。サバティカル中は滞在先のドイツの大学にて評判がよいとされる先生の授業を観察して参考にさせてもらいました。正解を求めて試行錯誤を続けているのが正直なところです。

これを前提に今のところ僕が思うと

ころを述べるとすれば、質の高い授業の条件の一つは**教師から学生への効果的な問いかけ**にあると思います。「教員の使命は学生の心に関心の火を灯すこと」と恩師は言っていました。学生に関心をもって講義に参加してもらうには、効果的な問いかけを行うことが大事だと思います。この効果的な問いかけが難しいのですが、最近では、自分が関心のある学術的・理論上の課題を扱うことが学生自身の関心を喚起することにつながると思うようになりました。基本的には学術会における古典的な議論や最新の論争を扱うように

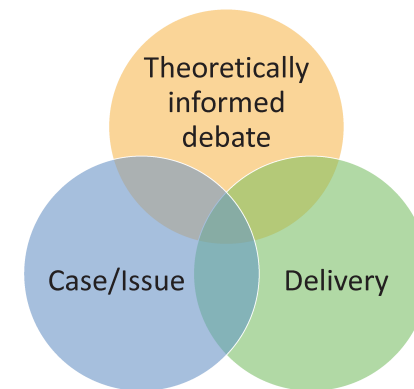
しているのですが、これらをそのまま学生に提供するのではなく、その話題の背景にある理論的な系譜や複眼的な理論的解釈をディベートとしてわかりやすく提供することで、学生たちに考えてもらいます。自分が関心のある学術的な話題ならば、熱意をもって講義を進めることができます。古典的な議論や現在進行形の問題を取り扱うからこそ、学生たちから出来るだけ多くの意見を聞きたい欲求が自分のなかに生まれますので、自然とインタラクティブな授業になります。

二つ目は学生自身の人生に直接関わる問題を考察の事例（ケース）として扱うことです。自分の学生時代を振り返ってみると、「この授業は僕の人生にとって何の意味があるんだろう」と思う授業がたくさんありました。教科書の中の話と自分の生活との繋がりがわかかった。学生が同じことを感じることはないように、社会に出る前に考えてほしいこと、知っておくべきこと、つまり時代を象徴する社会問題などを、それについての分析枠組みとともに提供する授業構成にしています。学生に「よい授業とは？」と尋ねると

様々な答えが返ってきますが、そのうちのひとつに「" controversial topic" を扱う授業は面白い」と述べる学生がいました。重要な社会問題を、1点目の学術的議論のコンテキストで考えてもらうようにしています。そして、現実の社会問題と直接関わりのある人（在日ムスリムの方や大分で労働運動に従事している方など）をゲストとして招待し、当事者にお話してもらうことで彼ら・彼女らの身に実際に起こっている問題について考えることも大事にしています。

三つ目は知識をいかに効果的にデリバリーするかです。学会で話題の議論や論争など難しい内容を伝えるときは、わかりやすくゆっくりと積み木を重ねるように丁寧に話すことを心がけています。日本の学术界では特に、難しいことを難しく話すことで聴衆をばか一んとさせた者勝ちのような風潮がありますが、それは理解を育むのではなく superstition を産むことになると思います（Stevie Wonder 曰く）。効果的な知識のデリバリー方法については、ミネソタ FD プログラムで学んだことがとても役に立っています。スラ

イドは情報過多にならないように、文字は少なく、フォントの色やサイズを変えることで強弱をつけて表記しています。そして写真や図などイメージを多く使うようにしています。



## ▲ 労働組合の方のゲスト講義

また学生間の知識のデリバリーとして、できるだけ多くの学生から意見を共有できるように、まずは小グループでディスカッションの場を設け、その後出た意見を全体で発言してもらう構成をとっています。

以上の3つのポイントが揃っている授業が質の高い授業なのかもしれないと最近では考えるようになりました。

## Q. オンライン講義のための変更、工夫はありましたか？

A. “Less is more” という考え方がオンラインになってさらに強まりました。先学期に学生のニーズを知るためにアンケートを実施したのですが、不安定なネットワーク環境下や時差のある地域に住んでいる学生など、リアルタイムで強制的に受講することに強いストレスを感じている学生が散見されました。この状況を知ってからは出席を成績に反映したり、講義内で小テストを実施することをやめました。たとえば出席をとらなくても小テストを実施しなくても、こちらが面白い授業をすれば学生は集中力を保って受講してく



れます。学生が学びたいとき・学べるときに学べる環境を作るために、講義録音、スライド、配布資料などは全てオンラインで提供し、**学習の柔軟性を高めました。**

また、以前よりも一方的に話すレクチャー時間を短縮しました。長時間画面に向かって集中力を持続させなければならない状況は学生を必要以上に疲弊させるので、これまで以上に話す内容を取捨選択するようになりました。その一方で議論する価値のあるテーマを提供し、学生同士で話す時間をできる限り頻繁にもち、ストレスを

緩和すると同時にインタラクティブな授業を創ることに努力しました。

---

### Q. 授業内容はどのように改善されていますか？

**A.** 一つは、講義スライドに学生の反応がよかった部分・悪かった部分にメモを残しているのが、それをもとに改善を行っています。もう一つは学生からの授業評価アンケートの「良かった点」「改善してほしい点」の欄をもとに講義内容を毎年変更しています。自

分自身の主観的なフィードバックと学生からの直接的なフィードバックにできるように改善を行っています。

先にも述べましたが、他大学に所属する先生とある程度時間をとって交流する機会があれば、講義デザインについて尋ねたり、授業を観察させてもらったりしています。

そして、学術界の最新の議論や知見を伝えるために、自分の研究分野とは直結しなくても、学会の様々な部会に出席して、グローバルレベルの学術界の議論の動向を常にアップデートする

ようにはしています。

---

### Q 授業をするにあたって大切にしていることは何ですか？

**A.** 僕が一番大切にしていることは、**教育と研究のバランスを保つ**ことです。学生に教えることのほとんどは自身の研究活動・経験によって培われたマインドに由来するものです。例えばコロナ禍での資料の集め方や学術界における議論の動向など、自分が研究活動に勤しんでいるからこそ、学生の要

求に応えることができます。特に、方法論の授業や卒論執筆に向けた学生指導では、自身の研究活動の成果が教育の質に如実に現れると思います。まず自分が研究の第一線に立つための努力をずっと怠らないことが大切だと思います。APUは教育に偏重した大学で研究を比較的軽視してきた経緯がありますが、今後競争力を保っていくには教育と研究のバランスを回復することが重要だし、一方無くしては他方もあり得ないと思います。

もう一つはAPUの**多様性を尊重**した成績評価制度を構築することです。

選択肢問題からなる自動採点テストを得意とする学生もいれば、エッセイを得意とする学生もいます。個人ワークで実力を発揮する学生もいれば、グループ・ワークを好む学生もいます。学生によって得意分野は様々なのでテストでは両方の形式を採用したり、レポートでは個人かグループかを自由に選べるようにしたりすることで個性や強みをつぶさない課題の出し方をしています。

---

### Q 学生に期待することは何ですか？

**A.** APUの学生の学修姿勢については概ね満足しています。APUの学生は知的好奇心にあふれていると感じますし、質問をすれば多様な意見を活発に、積極的に出してくれるのでおもしろいです。真剣に質問しがいがあります。しいて言うならもっと積極的に発言してくれるといいですね。答えがわからないのであれば、質問で返してくれてもいいし、なんでもいいから発言してくれると反応も分かりやすいです。あ

らゆる地域から来ている学生たちの意見は、留学でもしなければ得られない情報を生の経験として聞ける貴重なもので、APUの強みである学習環境のファウンデーションです。自分の経験を少し話すだけでも他の人の学びが深まるのでぜひ発言してほしいです。

それから、授業評価アンケートを真面目に受け取ってほしいということがあります。僕はみなさんの反応をもとに来期の授業を創っているのですが、このアンケートが違いを生んでいることを知っていてほしいです。

# インタビューの感想

児島先生が工夫されている 3 点の中でも「人生に関係のある内容を取り上げる」というのは学生の関心を引き出すことに最も効果的だと思いました。自身の経験や実際に身の回りに起きたことを含めて意見交換ができるため、自然と講義内での意見も活発に飛び交うようになっているのだと感じます。また、成績評価法やオンライン講義での工夫では、APU の学生の「多様性を生かす」といういい反面で生じる、課題の一つずつをケアし解決していくことで、より多様性を尊重した好ましい学びの環境を整えていくことができているのだと納得しました。

## 「Q」とは

APU で素晴らしい授業を行っている先生方はたくさんいらっしゃいますが、先生方が授業中にどのような工夫をしているのか知ることが出来れば、他の先生の授業改善にも役立つ。そのために、インタビューをして授業の工夫を教えてください、ということで始めた取り組みです。この記事は、授業の「Quality=質」を高める、質を高めるための「Question=問」に答える、授業改善の「Queue=列」をなす、など、色々な意味を込めて「Q」と名付けました。先生方の授業の質向上の「Quest」に役立てられると幸いです。